

汲古一七

—講演より—
『書の現代性』(六)

中村素堂

金文など、誰にでも見せるためにやったのではない。「子々孫々これを長く宝とせよ」という言葉がいつも終わりに付いているのを見ても判るように私の家にはこういうことが伝わっている。こういう物を大事にしている家だという誇りをもって見せている。だからいつも室内で、目の前で限定された人に見せているわけです。それが屋外において、不特定多数の人に見せるということになれば、文字は広い所で目に訴えてくるものを持たなければならぬ。普通の篆文、小篆の細さだけでは見られないでしょう。ところが隸書のよくな線になると、あんなに細い線を使つて急に大きく波法ができるでしょう？波法というのは、そういう事のために発達したんです。私は大学でも、波法発生の原因には骨をおつて講義したんです。波法というのは、不特定の人に、無限の空間の中で訴えようというために生まれた裝飾性であるということです。そういうふうには、視距離が遠くなり始めて、不特定の大勢の人に訴えようと思うと文字は迫力を帯びてくる。視距離にしたがつて字の効果現象を考えるわけです。迫力を必要としてくるわけです。これが、現代性の書というものをも、もう一度新しい目で見なければいけない理由のひとつで、造形の上でこれが「現代性」だといえるもの、口はばつたいい分ですが、今、現代性の書というものは、独断のようですが硬質の書とでもいふべきものだと思う。平安以後近代の書というのは、ほとんど軟質の書だと思ふ。視距離が近いのですから、ちよつとした抑揚でも、その響きが見る人の目に訴えてくるわけです。ところがこのごろは作品鑑賞の場が非常に広がつて、第一にわれわれが、自分の作品を人に訴えようと思ふ時には、展覧会だとか、画廊に持つて行かなければ、多くの人に見てもらえないでしょう？そういう所の建物全部が硬質の建造物です。コンクリートであつたりして——。砂ワラずりの壁で床柱があつて、前のほうに香炉を置いてなると所はありません。みな非情なものです。情け容赦のない、固いコンクリートの壁だとかボードみたいなので、美術館に行つて

も、固い所に立つて、遠い視距離の所で立つて物を鑑賞する。ああいう場で、ハッと訴えてこなければ効果が上がらないでしょう？傍らに寄つてみて、こんな墨の色かなんていうのでは困るわけです。見た瞬間に訴えてくるもの——。あんな固い建造物で、あんな鑑賞様式で、あれだけ広い空間の中に置かれて、なおかつ、その書が人に訴えてこなければならぬとなつたら書は硬質にならざるを得ないと思ふのです。今までの発達の過程から見ても——。今の書の線を見ると、あなたの方がどんな法帖を開いてみても、今書いている書に及ぶほどの硬質の書を書いている人はひとりもないと思ふ。しかもこの硬質の書でなければ、展覧会の効果が完全に上がらない。お座敷の中で静かに書いているものを、そのつど展覧会に持つて行けば見られるかといえ、この人は息をしているのですか？といいたいような字になつてしまふのじゃないか。だから、相当な呼吸を貯えておいて、ハッと吐く息でぶつかつてくるもので書かなければ、人間に訴えてくるような書にならない。

いちばんびつくりするのは仮名ですね。王朝風とか、平安朝の巻物にあつたような何々切といわれるものを、仮りにそのまま出してごらんさい。

昨日でしたか、上野である展覧会を見ていたのですが、小さな仮名を一面に書いた色紙が格子みたいに貼つてあつたんです。私は障子かなと思つた。少しこげ茶の障子かと思つたんです。障子のような樹目だったから、すすけたように見えたのは仮名だった。そういうただで傍に寄つて見ませんよ。むかしの何とか帖みたいなものを、細かくびつしり書いたものがあつたら、人に訴えてくる前に人は見ません。第一読めないです。一種(音?)の歌をあれだけの面積に、二メートル平方もあるようなキャンバスに向かつて、すごい線でぶつけてくる。しかもそれは穂のあれたような線でもつてきて、すごい傾斜を持ちながら、むかしの人がチラシ書きを書いたような調子でやっている。チラシとは何かという事をいつか申したことがあります、チラシは目で見ると音楽性です。視覚に訴える音楽性がチラシ書きの出発なんです。(つづく)

『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。